

翻刻『幕末維新絵物語』 卷二

天理大学

中之島図書館

中央図書館

佐藤 敏江

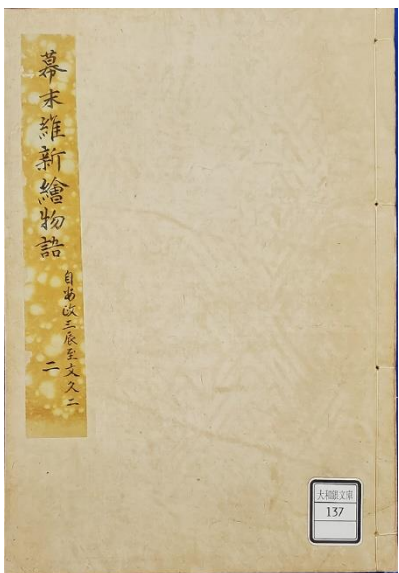
日置 将之

小笠原 弘之・北川 敬子・灘井 雅人・

苗村 昌世・八木 美恵・山田 瑞穂

はじめに

原資料は大阪府立中之島図書館蔵(大和銀／一三七)全六冊の内第二巻。二十四×十六cm 表・裏表紙各一、本文四十二丁。



本資料は全六冊から成る、幕末から明治にかけての風聞集である。巻一は『大阪府立図書館紀要第四十八号』で翻刻している。今回翻刻する巻二は、題簽に「自安政三辰至文久二」とあり、安政三年(一八五六)から文久二年(一八六二)までに、実録物や一枚摺りで取り上げられ、巷で話題になった話を、概ね時系列で、大阪での出来事を中心に収載している。ただし、巻二で特に多く触れられているのは、安政七年(一八六〇)三月三日に起こった桜田門外の変で、見開きでその事件の様子を描いた絵が続き、関係の人物のその後についても記録されている。当時の庶民に与えた衝撃の大きさがうかがえる。

本資料は写本であるが、本文の後で水彩の挿画を書いている。そのため、文字の部分の墨が流れてしまっており、また巻一同様、手摺れによる汚れやいたずら書きのため、文字が判読不能になっている箇所が多い。特に最終頁の記事は判読可能な文字が非常に少なく、内容を正確に読み取ることができなかった。ただ描かれた城図のみが印象に残る。

瓦版などから引き写したものと考えられるため、記載された年と干支に不一致があったり、十三代將軍の他界を十四代と間違って記している記事などもあり、正確な記録とはいいがたいが、幕末に生きた人々の関心事がよくわかる資料となっている。

参考

大阪府立中之島図書館編『大阪府立中之島図書館所蔵 大和銀文庫目録』公益信託大和銀文庫基金、二〇〇四年

凡例

原本の忠実な翻刻を原則とし、旧漢字はそのまま表記した。

異体字は標準の字体に改めた。但しろ(より)坎(歟)×(しめ)などはそのままとした。かなの古体・変体は原則として現行の平かなを使用した。

但し、江(え)・者(は)などの慣用字は、原本のままとし小字で表記した。

反復記号「ゝ」「々」「く」「く」等は原本の通りに表記した。

原本に句読点はないが、読みやすくするため編者において半角のスペースを設けた。

解読不能の字は□で示し、誤字や確定できない文字は(カ)と傍注した。

自安政三辰至文久二
幕末維新絵物語 卷二

てつち 亀吉 當十四三而其ころ
ト云 評ばん高し

安政三辰七月去ル大家のでつち幼男ヲつれ天神亀ノ池に遊ぶ あやまちて四才ニなる幼男池へ落こむ
丁児つゞいて飛こみ引つかみ宙にさし上 幼男さし上たおも身にて足にへこみ兩人とも既にあぶなし
此時天神さまのひかへにや 若ひもの飛ビこみ兩人をたすける 此事公義江きこえ亀吉へ五貫文 飛ヒ
こみし者へ三貫文褒美下さるゝ

へ先達而之孝行娘と此下りを取くみ角ノ芝居にて姉いそを離寛 弟亀吉あらし和三郎大當りなり
へ萬歳乃齡ひ壽く亀の池名も高砂の松のいさほし

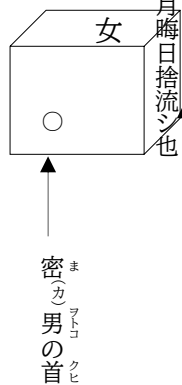
狸女に化す 新地うら町樋西すし
少シ北へ下りる吉平大明神これなり

安政三辰七月新地二丁目うら町新助といふ大茶や江入こむ料理人別して上手ナリ 此人やもめにて
少シ変人にて女房なし 朝ゆけバ夜半迄かへらず 夜半よりかへりそれる赤本をよむ 別して正直もの
ニ而近所のうけよし 有晩に本よむそバに女壺人すハリ居る 廿才計りなり 顔に大きなあざあり 此
人ふりかへり見れハにこゝわらふ かまわす本よみいたり うしろろ火をかき立る それより新助わ
れハ何ものなるぞ 化粧のものかトとかむる時女是覺ありやト我顔のあざをおしゆる 合点ゆかず居る
(カ)内捨おく 每ばんゝ
へあれを宮吉平とのも奉公を稲荷にするハおとなしい人ト

箱入りの仕置

安政四巳四月晦日此如く女生なから中に入レ前に男之首釘付に女の方ヲむけ突ながす 此箱流し天
保山江付き箱割てやりにかしける 女行かたしれずなるト云 此事嘘とおもひ笑ふ内五月七日にまた
へ此ごとくして中ノしま流れる 是淀家中の外男ハむかしこれ家風と相見へ二度目ハ珍らしから
ずなれとも珍節故こゝに画スナリ

へ君が為おしからざりし命さへ長くもがなと淀の川波



蛇のうらみ 別して悪徒坊主也
五十八才

安政四五月もつばら市中もらひあるく蛇つかいのぼうず高らいはしすしニ而へひつかふ 若ひ衆より
かゝりて其へび尾ノきわ迄吞メハ式百文遣わすへしと聞より受合て吞みかゝる 大方尾二三寸残ると
きへびくるしきやら腹ノ内へはいらんとする 坊主ハくるしく引出さんとする 見物もいらざる事いふ
て見る目つらくする内だんゝとのどへ落こみける 坊主ハ二百文にてよくづら引ぱり高らいはしすし

をくるひまわり難波はしより飛ヒこみ死するナリ

くるしや〜

蛇で口やしなふた口なれば口からのんで蛇で死す

たすけ玉へ〜

役人の手どり あわじ町

坊主図

(ママ)

同閏五月十月中旬米多へ這入百両計盗み吟味中 其よく晩其近所へ這入五十両盗み立きらんとす

此所江御下役常供留蔵引つれ此所へ長町よりかへりがけうろん成ものに出合イけるそ留蔵とら

へよと申付る 留蔵ハ早□□□にてと聲かけ追付る 此もの壺□□にげて辻まわり角へかゞむし

らぬ留蔵辻まわり(カ) □ □ くい劔にて咽つき通されたおる、此音に旦那はしり付ハ留蔵ハ死す 盗

人ハ取り□□しける 其ころ此評判高し 是珍せつなり(カ)

因果とて紀州乃一の富蔵も突キとめられて長の旅立 東四

だんまり

常供留蔵

御用提灯図

大坂地しん

浪花
一とう

安政四閏五月十日夜ル八ツ時大地震ユル 但シ巷尺ノゆりなり

浪花一とうかくのごとし 皆く内に居るものなし 先達而の

地しんにこりくして生た心地ハなし 世のくだける瑞相か

神仏之御とかめなるか 何にもせよ 寄代のふしぎを見る事

じやナアト 見へ切ル所の(カ)みな青ひ顔ナリ

何としてこのごろ天地中あしくぎげん直さずゆり直しとは

世直り

アレエ

水用

こりや
叶わん



にせ役人跡

同閏五月中旬南船場両替の丁児車(カ)いふに忒部金三百両入引所江持参 稻荷の社内にて公儀役人と

おほしき人丁児ヲとらへ横つらニツ三ツくらわし 久宝寺町の會所へつれゆく 會所ハ本ノ役人ト心得あ

しらふ 此男わらし(カ)ほどき上座に直り 丁児ハ會所の床にす(カ)はり□□き 旦那今日本はし會所よ

り是江す□□うなれば其用意すべしは丁児□分あれば急度番いたすべし 我レハ旦那むかいにまいる□

□□右之きいふを下役に持タセ日本はしへ行と 下役ヲもどし行□□れす□□ける 丁児之親方よ

り是ヲ聞付番とう参れとも一さいわからず 二日たてともわからず日本□□たつねけれハ 是な事也

やうく盗人トいふ事相わかり二部金の盜賊(カ)詮義きひしくなりにける

「盗人もよつほどつらのかわ財布町役人もゑらひ二歩金也

「おのれ此間から

尋ねいるなり
はや／＼
うせい

にせ役人

久宝寺町ノ會所江引きたる

ゑらひ目にあわしま
大明神じや

丁児

北濱鍵やノてかけ

孝心義心

安政四六月妾宅ノ隣り少々ふしんする時 手傳となり座しきヲのぞく てかけあつきに縁はなにひる
寝する 手傳是を見てわらふ 其こへにて目をさまし我カ寝さまに驚キ直さま□おき庭に下り 右之
手傳をよび 我レ□む事□聞下さるやトいふ 手傳わからず何ンなりとも仰□□られトいふ てかけ申
われに一人の母アリ 只今□かけ余人に咄しありて評判高くな□バわたしノ隙出る也 きすれバ母ハか
つ命におよぶべし 何とそ外へ傳言なきよふ頼入 するしとして忒部金五両出して手傳正直ものにて
此やうな心ばいなくとも外／＼へ申やうなわたくしならずとつきもどす てかけ申 何とそわたしノ志
トむりにもたしかへす ●

●手傳急度誰にも申さずと義定いたし金五両 かもらひかへり まづしけれバ忒部金一ツ両かへにゆ
く 前日忒部金の(カ)とうぞくゆへ両かへ□□公義よりころへあるゆへ手傳公義によひ出されせん
ぎ 逢事けれともてかけにたのまれし義定もたしかたころされてもいわぬトいふ いよ／＼忒部金ノ
ぬす人ニおちんとする時くるしさのあまりまつすぐに申 てかけよひいだされ對けつにおよぶ 公義も
両人の真心をかんし鍵やだんなよびいたし

相場のくるひ

安政四七月中旬堂じま濱仕に紙すきや相場いたし方あしく みな／＼うらむといへども其ま／＼すまし
ける 有ル日みどりばし北詰髪ゆいふと吉右之かみすきや昼めし喰ふ所見かけ何気なく這入切り付
たる びつくりいたしにげ出す 三ヶ所なれとも氣おくれいたしたおる、 みな／＼とめけるゆへふと
吉かへる 役人より聞合せにて吉五郎牢者申付らるゝ

「髪ゆいと紙すきやとの間違ひハ上ミの通櫛にかけてきつぱり

ド盗人まちくされ

だれそ来てくれ

藝者の遠島

女房アリ五才之男子アリ
公義にてわかれヲなげく

同七月船町ニ而某ノてかけあた心多くして役者をヒイキする事くせナリ 此内へ来る女かみゆいアリこれ
悪女にして只よくつら引ぱる 団治郎 嶋之助 米蔵 女形澤むら小萩、此一座皆先役にてかみゆひと
なれあひとりたかりたるすいがらとハ知らず中村歌十郎引けり 人ノてかけに沢山金錢むさぼりたる
やうおもわれ公義へ聞コへ 詮義之上てかけハ勿論女かみゆひ引出され町あづけ 歌十郎ハ薩州新しま

江流罪ト成 女かみゆいハ町はらひ てかけハ旦那よりいとま 氣ノとくハ歌十郎也 流さるゝ餞別澤山也 珍事なれハ爰に記ス

「君ゆへにこんなうき目にあわじやが千どりかよわぬ味じな遠嶋エンベウ

命てもあげるわいナア 歌さん

てかけうの

悪婦也

髪結たけ

御両人さんうれしそうな

顔わいナア

中村歌十郎

東男浪華二而切腹アツマツトコ

嘉永四秋八代目団十郎心願有て金ひらさんけいト申立江戸を出立ス 名古屋ニ而半芝居市川白猿にて打所大坂銀主うへ久是ヲ聞七百両にて持むかふ それより中ノ芝居へ入こむ也 江戸放レテ団十郎ノ名ハあらハせず 植久ハ団十郎をいださんといふ 白猿ト云おし合ウ内江戸ニ而死ナねハならぬ事あるなれバ 七百両取とくにて親にわたし 是孝道なれとも先立事是不幸なれバ其趣ギ書置認メ植久宅ニ而切腹いたし相果見事也 是珍事なれバ

「浪華津が身の尾張とハ白玉乃露ときへゆく安宅若ものアタカ

ゑび蔵 ちから
おとし

新之助

アゝもはや
事かきれたか
ざんねん

弟市川猿蔵

これ兄者人

おまへにわかれなんとしやう

九蔵事団蔵

館主うへ久

ゑらい目にあわしま
大明神とけつかるわい

黄泉の鬼

安政二九月頭取しらぬ火背中に瘍ヤウ□いたむ事はなハだしけれバ辛抱いたしかね外科花岡寄ヨひ見せる所先生さつそくむね切りうみ澤山出けれども 底そこいたみ少々風は入 始メより痛み増し 翌日ハツ時に往生す 弟子内のなげき大方ならず 葬そうゝいとなみ其人数渡辺ばしう梅田までつゞくなり 濱のうけよく其後弟子矢筈山鉄ハッ之助後改名いたし雲早山十五両の関取也 今の湊これなり

「死するとハけふ迄誰も知らぬ火が消キエテ蓮華の下手へたな花岡

花岡先生

しぐじり

不知火

熊川

恋の闇 大西や

「龍ヶ峰みね

安政四巳ノ八月中旬北ノ新地ニ而小野川秀五郎元八陣ト云 其内之すもふ取 元ハ出来山當時十両之関取 新地大西や重吉トいふげいことなしみかさね少シ間ちかいより大西やへきたり 乱酒らんしゆ之所ちからつよくさんゝにあばれる ちかづくものなくそれる小野川来りてからだしぱり上我カ部家へつれかへりよく日異見くハゑける 大西や金五十カ両物のそんじしろ遣つかすナリ 其後江戸行の時難□て吹キ流カされ心氣つかれ死去スナリ 是遠州灘ナリ

「恋ゆへにチョトさい難に大西屋割た道具ハ新らば出来山

ふしぎの出シ店

同辰之年回向院角力之節うら店に住ム魚ノぎるふり今日をすぎかねる人雲龍をヒイキナリ 七日目といふ日魚賣りのかへるさすもふ江は入ける 境川雲龍ノすもふ心よふ 雲龍勝時賣り上老貫文之◎うん龍になける 是ヲ見て雲龍いたゞき此◎を弟子にもたせ部家にかへる 肴やも内にかへる 内ノかゝ鍋釜洗ふて待うけし所ヤレこちの人まちなねたり はやゝ賣り上を出し玉へ食物のこしらへいたさんといふ 男申けるハ今日老貫文有りたれどもふ二而雲龍になげたりといふ それより女夫いきかいトなり亭主申ハ一たん男たる物関取に遣したる◎とりかへすべきいわれなしトいふ時女房其まゝ雲龍が部家へ行関取にあひ今日おまへ様勝の時なげし老貫文之◎御かへし下さるへし 何分ヒイキにておもわずしらずなげしゆへ我とまづしき女夫ぐらしのざるふり今日をすぎかね候 此たひハひきやうなから御もとし下され またゝ出世いたし候得ハはりこむなりトことをわけてねがふ 雲龍ハはじめおわり聞とりて申けるハ男かヒイキにて下されし花戻すべきいわれなし 貴公ハ行かた□へ所書すへし いふ雲龍ハ魚や女房を先へかへし 弟子をよび老貫ぐらひなる魚一まい□□にのこさせ其はた江金十両紙にひねりそうゝ弟子式人右之肴や江遣しける

口上

「いまた角力之数ならぬ我レをまつしき中よりヒイキ下され末代迄もかたじけなく旦那衆のヒイキよりハ猶ゝ我身之大慶 しつれいながら何にても用事あらバ内證を申こざるべし ト申遣り候

「是より肴や親父と名を上る 雲龍ハ猶ゝヒイキつよくなり 江戸中鳴りわたる 其ころ雲龍と親子のことし

(店の幟図)

流一雲龍汁

廣しまノ奇童

安政四三月藝州廣しま百姓なにかし忤七才ニ而近所より挽臼かりて戻す 廣しまの家の中用事ありて通りあわし此事咄しいたす也 段ゝ上ゝへ聞コへ殿さまより呼びだし玉ひ 親付そい出る 十五才迄大せつにぞでてるべしと五十石之扶持方下さるゝ 七才ニ而十三才計ノ骸なり カハ廿才計也 弁ぜつハよし □相別して殿さま御氣に入ル也 末まであつはれ剛勇とたのしみ玉ふト云
「力量ハ胸廣しまの事なれば只の子どもと違ひ鷹の羽 鬼面
おそろ □□ 怪力じや 「エイゝゝゝ ヨヤサノサ

閻魔起證文

安政四巳三月無縁経より引つゞき五十日ノ開帳ナリ 朔日より雨降り出し五十日ケ間一日も日よりないかなる事にや 開帳おわりの日よりうそついた如く日本晴 是ふしきの第一なり

地ごくより中山寺観音江送りし起證文あまり得解上手きに参詣人のなみだ雨と相見へける
何分雨にてさんけいすくなし 残念く

「ことわりじや雨が下なら降りもせよ日の本たれば照らし玉ハレ

絵解き光景図

神國の徳

千時安政四巳ノ年加奈川交易場いよく出来いたし 揚屋町唐人やしき其中にアメリカ大船ノ大将
日本にての大名也 大兵にして軍学もよし 大勇にして日本ノ大名大がい味方にいたせし 智者もふト
薫カスルといふ太夫トなしみかさね 太夫も唐人に付まとひける 此唐人此度ヒ日本の大小名十五大名味方
に付し故一度ニ手からはしめなれハアメリカへ帰るといふ 太夫これを聞かず同船いたしかへるといふ
船大將なれバ女ハつれられずといふ たがいにわかれをおしみ其夜ハ十分に酔ひつづれたまひ□に寝た
間に 太夫ハ唐人懷中いたしける連判さぐり出し其まゝはしり⊕屋しきへかけこみ連判ヲ□しける 此
唐人酒ノ多ひきめて加奈川大そうどふ 太夫ハちくてん 連判ノ大名ハ金玉ちゝみ上る也 唐人女にだ
まされて叛カ乱となる

アメリカ

リチャウクワン

千とせや
薫太夫

かならず二世かけて

二世かけて
ちぎるひよくの
連判を我カ大君の
こころやすめむ

李超官
かほるとかたく
申かはせてい也

松平薩摩守時義侯

同巳ノ年加奈川ノ太夫薫右之血判いたせし一卷盗み出し⊕屋しきへかけ込み殿さまに直く相わたし
度トねかいける との悦ひ玉ひ披見いたされ皆く国元へ下し玉ひ大切ツに
「名ハ薫カホる日本一乃手がらとて千歳屋までも残る鹿兒島カコシマ

日本ト外国申合せの書手に入り祝ひ玉ふ所

置や亭主

とのさまよろしくたのみそんじ舁る

かほるノ父

おねかい申奉る

かほる

天下ノ為にハ何おしからぬ此命

時ならぬ花盛り 江戸

安政四巳十月ふじと桜一時にさかり見物群衆するナリ 是よき事にあらず 時ならぬ花なれハ其ころ
ノ儒者知者いろくトはんじける 花ハさくら木人ハ武士と申 ふじハなりさがると迄はんじる人これ
あり

「後におもひ合すれば井伊ハ大老ト成人ハ武士こゝあらわるゝ ふじハ成さかるハ水戸との蟄居これな
りさかるナリ 萬延元申としにハ

「櫻田にてふじにあひ首とられ今なりさがる前表とおもわるゝ恐るべしく

「ふじなれば花たれるとハ不吉なるにうらみハつもる雪桜田

(花見光景図) ふしぎしや これハ奇妙

三人坊主 名高し

安政五年ノとし思ひ合し如く

急々坊主三人皆々法華宗ニ而

其ころの役者に生うつしニ而

是珍事なりとて爰に書ス

浪花三人坊主是ナリ

成田坊

是馬のりノ

柳吉の孫

梅吉之子也

おろかしく

坊主にする也

入成田坊ハ 馬曲のりノ太夫柳吉ノ

娘梅吉之倅也少しアマロ

入延三坊ハ 女夫池妙見堂の
西角に庵りを結ぶ

となへするゆへ
なるたやといふナリ

入南枝尼ハ 曾根崎領免
茶やむかいに庵ヲ結ぶ

大ぐわん成就ツかも子エ

南枝尼

入うそじやない焼香ハ

これ扇や太夫三而難づるトいふ

都大徳寺羽柴が

ぜんせい請出されても

だいた三坊主ぎみ

兄か悪徒ゆへに坊主になる

美人ナリうき茶や向ひに庵主ナリ

女夫はし
に住居スル

延三坊

これ元こふくや倅也

火の車

巳ノ十二月七ツ時

鳴のむらに

善しんなしに

欲ば々なり

此日糸つむきいる所

内になきごへきこゆるト

いへとも見へず其内に

そらに鳴き声聞コゆる

其夜ねつ症ニ而死する

死がい火あふ□の如し

入我れながらころの鬼に責められて胸に焚火に我身こがさん

同午正月

天王寺むらに四十計りの一人くらし居る

けんどん邪見にくまれ物ナリ ある日めし

くわんとせし所何やらのどくるしく

見るまに血を三升ほど

はきなき顔に死ス

其死かい焼ケふすぼりて

やゝ子のごとし

人ノよき事ハねたまノわる口

はらあしき女 みなくよむ人おそるべし



東のつかい都にて味噌

安政五年正月上旬簾元なれども徳川ヨリ三千石頂戴いたし居る儒道ノ瑞一トいふ唐書之儀ニ付都江来
り我智たくましきを力に公家ヲたおさんと優くとして入来り 此文御見わけ下され度奉存ルト差
出ス 殿上人數多之内より中山殿いろくトなめ玉ひ林ニ向ひ我やうくわかり候 貴殿も得とく
致しつらん 遠慮なし大聲にて讀み聞すべし 儒者なれハ知らずとハいわれまい 其時林大かく我等得
とくいたし候なれども都にハ讀み下らず 我に讀まし成ほどと仰られん為なるべし 我讀マズんハ日本
くらやみ也ト高慢顔にて返答ス 中山殿少シ怒らせ玉ひ林大かく尾籠て有ふ 爰をいづくとおもふ
神々の御すヘ乃寄所おのれごときノ及ふへき所にあらずトにらみ玉ひ是日本ちやうぶくノ書也 よく
わきまへおるか 林大學ハ申ける これハ日本を祝し目出度書ナリ それゆへ都コヘ持参也トいふ ●
●中山申されけるハそれハ讀み下しハ目出度とも 尻から讀み戻して見よ 異国申合シ日本を攻メと
らんといふ事わからざるかかゝる不吉の書を都江持参いたし朝廷ヲ驚かし奉ハ異国ト一味いたしてお
るか林大かくはやく尻から讀て見よ 立横ト讀ム時ハ日本にも味方アリトいふ事あらわれたり 但シ
おのれも異国に味かた成か 左なくハはやく立かへり異国へ味方ヲ詮義せよ おのれ江戸ノ智者なれ
バ余ノものハ皆あほナリ はやく下り此通り申聞かせよくさり儒者ト申ける

都の賢人

東ノ儒者

中山大納言

林大學

中山殿ノ器の廣き所梵人にあらざる所ヲしり恐れ入てい

大麥の糸口 是ナリ

賢人之聞エあれとも是を見れば愚将というべし

後悔 先にたゝずとハ是等をさしていふべし

安政五戊午どし水戸隠居池内大學といふ者ヲまたなきものと何事によらずうたかいてゐなくとりあ
け玉ふ 其虚に乗りていんきよ乃膝サちかく寄る 忠臣をことくく讒言いたし程なく二千五百石之
用人頭タル高はし多一郎ヲ遠ざけさせそれより後多くいんきよの不興こふむりしりそくもの数しれ
ず 皆池内大かくの辨にまどハされ隠居愚よりおこる事なり 高橋ハそれより浪人と成り主家ヲ守護
しいる也 未とし水戸尾張越前蟄居ト成 是井伊之作と心得申とし三月浪人いたせし者打より桜田ニ
而大老ヲ打事主家ヲおもひ浪人なからも徒黨寄せしも是皆高はし多一郎の謀計なり 後に浪花津天
王寺大こく堂ニ而切ふく見事にて諸国鳴りひびく 適レおしき武士なり

ハ池内江ツイ我が智恵に蹴つまづき

(扇面)

悪 事 千 里 走ル

尾州侯大坂之城江居エ
一ツ橋ヲ我実子なれハ是を
天下に定メ自分ハ
箱館に城ヲ築キ
居らんたくみ國主に
見すかされ其上に
蟄居申付られし方
かゝる乱おこるナリ

儒者

池内大學

謡能茶香花
詩歌劔術馬術
鑑長刀軍學何ニ一ツ抜目なき男

此人水戸との

蟄居いたし

水戸を立のき

京住居

浪人とも

これを

□ら(カ)い

かゝる小人之器辨ヲもつて人をまどわす
後に身のおわりを見てしるべし

にハか浪人 三十人
住居

同五午浪人中櫻田そうどふ出来する也 是皆池内大学ノ讒言によつて浪人する 江戸芝神明ノ辺に住居する所おい／＼池内ノ舌頭にかゝりし者此所寄り集り猶／＼忠義ヲはげみ居る所に此たび尾水越とも三家蟄居申付られ玉ひける 浪人いたせしこそ幸也 御知行いたゞけバ猶之事 浪人いたせハ誰ニはゞかる事あらじ 大老井伊之首引さげ皆／＼腹ヲかき切浪人之武士道ヲ見せ人ノ目を驚かせて申侍しハ此高はし多一郎とのち申せし事也

／＼智仁勇名も高橋の計略で積るうらみハさくら田の雪

三千石二而用人

高橋多一郎

五十一才

京諸司代出火 本田
ヤシキヨリ 備中守

同午正月下旬本田どの居間ヨリ出火ニ而京都大そうどふ 出火有ル故に

／＼粟田ノ宮ノ挑灯町奉行そうどふまぎれ蹴り上やぶり此尻り諸司代江来る 其上天子様ひぎ元さわがせしとがによつて諸司本能寺江おしこめト成いまだとがめ中京都を抜てにげかへり東都にて切腹之噂高し

／＼諸司我レが内から火を出して言訳たらず江戸へ消たり

時節の変火

安政五年の二月廿五日酉ノ刻ヨリ嵐橋二郎部家のびらに火うつり燃エ上り橋二郎ハ下部家ナリ

二かい三がいノ役者みな／＼火ノ中江飛こみけが人多し 歌六ノ門弟歌治郎女形三かいよりうしろノほそ合へ飛ヒ死する

／＼角より出火て太左衛門はし少シ東濱がハち嶋ノ内へとび 東北へ焼ル 其内若太夫ハ付キ新道エとび日本はし南長町毘沙門堂にてとまる 初夜ノころち北東風に替りける 法善寺ヨリ中すし相生町松ノ尾とかく 見世物小家 新川丸焼キ 土はしちなんば其内に地しんゆるなり 廿六日昼に火しづまる 十時ノ内かく如キ火ナリ 出火の夜南にあたり星いつる

／＼建替エてまた焼るとハ橋治郎はげしき風にゑらひ桑文

世三回忌ノ火又七週忌に焼ル

中村歌六 これ三度目ナリ

桑文百両火出しに成是にて芝居立ナリ

立役嵐離寛

五芝居みな／＼粉も残らず

松の奇瑞きずい

此松ハ元本庄弥一兵衛との庭の松なれども

安政五年ノ三月上旬気まゝ一方の庭の松

むかし此やうな事ありて北野、

枝ふりよし 此まつを見付梅田宗庵

地へうへし也 後に一方ノ庭の松ト

墓ふしん致し別ヘツして景よくいたし棟梁どうりやう

なり梅田へうれる時壺人死ス

有時此松見付はなしせし所さつそく

廣小路にて壺人死ス

金十両ニ相だんきまり梅田まではこびやうなく

北野より人歩やとひ小わた町を廣小路へ引ク

までに人二人命うしなふ 是ちいさい松

神木

なれども古樹ト見へてけがれの地へうられしヲ

元本庄弥一兵衛とのゝ庭ノ木なれども

くやむト相見へかくのごとし 死していやト

得手勝手ノ庭につき安政のころ

相見へ廣小路をうづこかず梅田にも人ノそんじる松

梅田より買に来る 此木はか所へ

おもしろなし 十両そんにいたし代なりとも

行事をきらいけが人□□□

取はかるふへしとて切りききみ風呂やち

札入いたし焚ものとなりてくちはてぬ 是珍事なるべし

日本ふ吉はんじ詞キツ はんじ

天保すへより五月のぼりノかわり

異国の為諸式高直故

紙細工の鯉はじまる 是日本人

浪花津ハみなく鯉上る也

文化ノころト違ひ三月節句之

代のすへにてうれい多く

市まハみなく笛を仕こみ

みなく涙ナリ

嘉永年□より大道く江

古瓦をうずめ手間にて入ル

異国より日本を

是地ち上る湯をおさへるト云也

尻りに鋪きかわらナリ

同

異国より黒キ皮渡り是

日本わつらひと成後に

田はこ入にいたし中く高直ナリ

黒かわおどしの鎧着る成

江戸ヨリはやる小くら帯一ハぐ前たれ

唐人船にハ別してよハし

是つよくして利かたなれとも

しゆらほとけの元なり

畳ノ井伊でいたしたる笠はやる

桜田にて臺から飛ふ成り

堂じま下駄引すりむかしの形くつし

加奈川交易ハ御免下駄

トウにて細工せしきせる筒はやる

是後に異国と筒を合せ

夏冬ともに さ(カ)ける直段高し 一て (カ)日本建 タかへなり

「鯉上る市松啼いしまなキ出す江戸小倉黒皮おどしそりや御めん下駄

天保すへより 文政すへよりなく
はじめ 市まはじめ

(鯉のぼり図)五月 (市ま図)

のぼりノ

かわり

紙細工

新吹

箱 通
宝 館

黒かわ
(田ばこ入れ図)

江戸

まへ

たれ(前垂れ図)

御めん下駄(下駄図)

江戸

小くら

帯(帯図)

砂きん石(簪図)

新町の櫻はやし

安政五年ノ三月ハ花さかり 二月仕こみニ其ころ何とのふ浪花すいびなれハなにかな人気直さんとて

廓三筋ともに申合せくら林にいたし相待所マツに思ひの外人氣薄うすく物入レそんと相見へ人氣

よからずはつむ事なし これちり安き華なればなり

「ぶら〜と瓢箪町の酒に酔ユひ顔櫻色一ト目千本シ

天神亀の池いさかい

同三月廿五日天神社内浄瑠璃小家には竹本津しま太夫伊賀越ハ三弦つる沢重蔵十ヶ年之間相三味也
重蔵ノちからニ而對馬くトいふ 其出もしらず 兩人出語り之時重蔵一撥ヒトハサはつれけるヲつしま尻目に
かけ笑ふ 十蔵これヲしる 其内に對馬ぜつくする 此時重蔵其まゝ三味せん下に置キ内へは入ル 對
馬太夫程なく地合ニ成ル これも這入けんくわト成にける □人テにハ病氣と云立イことハリいふ 弥太夫
替りせいすい記さか路大當り樂家ハ兩人惡言にて止ヤまず 弥太夫あひきつすれども重蔵聞ケすして中
直りなく今にてハ豊沢猿糸を相三味と成り後に江戸にて大當り

「亀の池鳥渡露澤乃いさかいにあいそ對馬と味あじを弥太夫

〔重蔵〕 たれのかげで對馬く〜といわれるぞ はじしらす これがわかれじや そふおもへ

〔弥太夫〕マア〜両方ともに□□□バ いわすともおれにまかして氣をしつめて

〔清〕 對馬がわからぬ

〔津しま太夫〕せい出してどん〜いふとけ

伊賀越ハ

津嶋太夫

諸司代脇坂中務太輔

同四月すへ江戸ヨリ奉出附而京都御いとまもらひ出立之節侍中洛中洛外にいたるまで別れヲおし
み皆くなみたこぼしける 脇坂公朝てい御用ひよろしく下く〜へも□とゞき月卿雲閣もわかれをおし
み玉ひける 江戸下り被成しを紀伊ヲ御直り被成殿下西ノ丸様ト申也 此附人役落之様なれども脇
坂之強勇ヲ見立かくはからひしもの也 是大慶トすべし

「都にも人氣龍野之殿たつのなればやがて出世乃すへを御老中

京ノ町人わかれヲおしむ 殿さまにも御けんしやうで

和唐 義をむすぶ

是ヨリ日本
大乱となる

同午七月中旬ねかい相濟いよく交易ト相成此たび乗り来る船六艘を五艘に乗り一そう八天下江
献上上るナリ 貢ものいたゞき早よりよこびかへるナリ 一そうのふね品川沖につなぎアル也 此一そ
うのふねに久駄舳積み来り 其舳舳にかつへみなく陸へ上りてより日本わる病ひ流行ト
なり多く人死する也 是みな異国ノはかり事に乗りしといふ

一日の本の袖アメリカの露にぬれ

大老宣

アメリカ

(職の図)

老中ノ宣

亜墨利伽

皇帝統仁天皇様 民安全ヲいのり給ふ

安政五年七月下旬天にむかい祈誓只下万民のうれいをかなしみ玉ひ 附而かゝる世に即位まし
く我不徳をなげき高樓に登り薄絹一まいにて三光に祈り給ふ事中く御心勞下され候事有かたき
賢帝ナリ 是に御代泰平ハ文久之すへに見る事うたがいなし
一萬民のなみだ積りて洩となり我大君の心ぬらして

帝ハ交易きらひ給ふといふ

朝廷ヨリ東へ御勅使

中山大納言忠能卿

勅命こふむり直さま都立給ふ

同午七月廿五日辰ノ上刻ヨリ別れをつげて都に立仕玉ふ也

勅使詞

一此度東ノ代官数多附添有りながら下々万民ノ政事よからず朝ていより申越ス事一ツとして用ひな
く加奈川ニ而ハ異国のまなび致し朝廷にそむき外国の風雅をうつし 日本のおとろへヲ待事眼前たり
それ故諸大名みなく我国江引取つまはじきする事 朝てい是をなげかせ玉ひ夫ゆへの勅命 都への返
答致さるべしとてきひしき御つかい それゆへ諸大名ハ天子さま江したが守護トなる

武蔵国道鐘山陣取

同午七月下旬より何ものともしらず此山エこもり凡千人余ト云みなく強勇トいふ 其内大将分三人
其ころ江戸中江落し文有り 文ニ曰謀反人はびこり日本かたむけんとす(カ)るもの天下ノ膝元に有り
是によつて是迄徳川ノ恩をしろものあれハ道くわん山江来るべしとの文言ナリ 是ハ水戸隠居にふきや
うこふむりし物ともト相見へ候 後年申とし謀反人之首取り日本くつがへしけるハ此余煩トしるべし
一いゝ火にろう人どもがはびこりてにつ本國に

十四代將軍御他界

醫道ハみなく御とらへと
成上り屋にてき(カ)うめいす

同午ノ七月將軍政事よからず 只癪性にして手まわりの女中 茶坊主 近習小性きらひて手打に仕給

ふくせ也 是にてハ天下動乱ノ元なりと幅將軍ヲ手をまわし点薬に
申付毒殺いたし將軍をうしない奉る 其後天下跡目もめ出し水戸
耆人アレイヤはイヤト自由ならざる故国主ハおもしろからず 皆々国
江引とり交退三ヶ年なしトいふ 其内紀伊より養子御入 朝てい
是にて納る

水戸いまだ得心^{とく}せず 是打て井伊との改メて大老ト成ル それ
段々露頭^{ろけん}にて水戸のおもわく点やくをもつて毒かいの事 天下
跡目を一ツ橋にいたし度思ふ事わかり三家蟄居^{ちつき}申付らるゝ

醫者ともハ入牢いたす いよゝ井伊水戸中よからず段々とうらんの糸口を引出しける也

田上法策^{さく}

奥用人

図

小ばやし主膳

日本の病ひの元ハ

御殿にて点薬に縄かける

武將^{ぶしやう}ゆへ腹ハ変れ□

和田玄伯老

点薬ノ頭

世界青^{アヲ}はれ

図

岡櫟仙院

俄の宿替大名陣家^{にんか やどかえ}

陣家くにて
諸々動乱ナリ

同年とし七月ヨリ亜墨利伽とも五固国^ケ交易はしまりてより段々諸々く人氣あしく国主く都ヨリ申付
られ丹波路高松侯 八幡山雲州 堺立花木津川土州 天保山ニハ因州 傳法備前 それゆへ浪花津やし
きく江役人詰かける故やしき江付因州ハ長屋のもの皆くほり出されこんきつ也 ほり川ニハ備前や
しきとなり丹波屋トいふ飴や明渡し八百石之侍這入ル 是百廿三年住あめやトいふ 是皆井伊かもん
殿をうらみ泣き居所ヲ立のく事目もあてられぬ珍事ナリトいふ

井伊とのく首^{くび}と飴利伽取かへしよこんな世界ハ水戸なしぞや

堀川飴や家あけわたしきつばり杓子^{アメリカとり}(杓子図)しや

切なしの停止^{ちやうじ}

十四代様
死去ニ付而也

安政五年八月十六日より切りなしと觸^{ふれ}るなり 別して昼肴や之聲夜なき一ツとう大工手傳風呂や茶
やハ別してきひしくなる 其中江はやり病^{ヤマ}ひ人死る事多し 米直段百四十八文是ニ付諸式高し 生^いた
こゝちハなかりける

殿下さま御代りに御目出度ニ而物のゆるしあると思ひの外かへつて御停止来りいよゝすいひと也
なげかぬものハなかりけり

一日にころりの銭で引くかな棒^ほ

自身番

いつまアゆりる事じややら

町内

切なしとハどふよくじや これで世けんがふけいきじや



箒星

此星八月十三日夕出て九月十五日に見へす成ル

長サ凡壹丈余
宵ノ中ハ真西
明かたハうし寅ノ
方に消える也

箒星の図

出る内一日ころりト申て今迄はたらく人寮付ハ其夜往生ナリ 今年ハ別して
豊年とおもひ之外難世界トなりて人氣あしくなけくびの所去儒者ヨリ是年
星と祝ひ直す 是より人氣すこし直る所に此中江切なしの停止商賣止に
あつかり乱戦ちかく見ゆる処へ極下ノ世界に生てくるしむ事 いかなる果固の
報ひそ 我身をくやむより外なしト云

此時九篠関白殿 星を見て御製 是より此ほしきへる

九重の空にたなびく箒星清き都にはく塵りもなし

征夷大將軍十五才也

稚年ヨリ強勇之きこへアル也

同八月下旬紀伊殿ヨリ十三才ニ而西ノ丸江御居り被遊権大納言ト
任シ給ひ それを宰相ト成り給ひ 廿九日に殿下に御直り被遊本

丸ニ而上様トとなへ奉る それより風呂やかじや桶や夜なき音高

キ商賣ゆりるナリ 御大名方御祝賀アル

損な代へ出て徳川乃流れ汲み

井伊殿

東藤侯

此日大老ト成

旗頭付そい

はぜ釣ふね難風

安政五年九月中旬南江戸ぼり五町目竹ヤ傳兵衛若ひもの 近所むすこ三人々四人其日ハ別して日本
ばれなれバ天保山江川ノ通ひふねのり出し 沖に釣るはせぶねハよく日よりをしりてことごとく上エも
登る 此三人うかくする内北風はげしく吹出し 昼半より七ツ時に紀州沼しま迄飛びける 三人ハ
千里も来るこち也 爰にて風止ム也 沼しまノ人濱手へ出てこれをたすけいづくの人ととふ 其時三
人なきわめき唐土ト心得砂ノ上にゆびにて大日本トかく

沼しまノもの大わらひ

それより大坂へおくる これ珍事ナリ

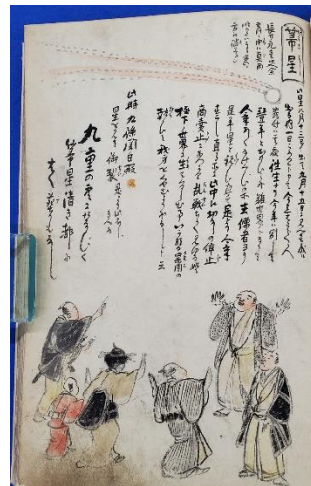
紀州

沼しま

天保山沖 鯨寄来る

但シ廿五尋

安政五年霜月右之通取まきけれともくじら取ル道具これなし
さつそく紀州侯江注進ス 天保山ニ而鯨とる事ならず 只毎日
く追いまわし 紀州熊野うらへつれゆき爰にて取ルが定例トす
それゆへ獵師みなく役にとられおいまわす也 中くくじら
うこかす 天保山乃くじらとて館ふね上荷かり切見物山の如し



「いづくち爰江鯨らと尋れバ天保山を一寸身くじら

東海道六郷の渡シ

一日ころりの悪法師飛どこみける
其日より此所にて数多取りころす也

安政六未八月此きし場江耆人之僧来りて申けるハ我レ渡りけれハ其あとへ悪僧耆人来るへし 是けつして渡すべからず 渡す時ハかならずのちにうれい有べし うたかふ事なしといふかとおもへハかきけず如くうせにける 其跡江はたして耆人の僧来り 見れハ聞しにたがわず悪鬼の相なり 渡し守此僧のせず此僧にらみていふ 扱ハ我をよくしりてさまたげなす事きつくわい也 おのれ渡さすハ我レ渡るべしと見る間に川江飛どこみ行かたしれずなる 其夜より六郷近在わつらいつくもの多 死スル物多し それより諸国わつらひ京 大坂も死人多し

諸国大乱一日ころり

未七月下旬ヨリ江戸此病ひ而八万人余死 八月ヨリ浪華津に渡る 七墓ともに死人山の如し 死人四五日つかへ焼ケず 其くさき事 是にて皆くうつる也 右之病氣二而米高もわすれ唐人の咄しも止み停止ゆへ神のいさめもならず 只あすハ我身にかゝるか けふハ我身かとあんしるばかり 大坂之死人凡三万人余といふ 堺ハ此病ひ二而首々多しといふ 古今未曾有ノ珍節ナリ

此時梅田ふんじつ乗り物七挺

同 千日 のり物五挺

ちよつ(カ)しやれて

「門ト中で行合ふものハ醫者坊主停止の鉄棒葬礼の駕

すがわら

「梅田取る數いしやはづむ世の中に何とて寺ハ世話しかるら舞

毒霜と毒土降る

是まいす事ふれに
まじわされ恐れるナリ

同未九月十五日より帚星入それニ付夜ルハどく霜ト土ふると云ふらす だんく人氣あしく其四五日夜ルあるく人ハ皆く此通りさながら乱しんの如し 身を持し人もむつかしい顔して通る事おかしアハハハハ呑み水も昼之内にくむ也 此時手まり程なるあられ降る 其音恐ろしく凡此くらひ也 大へん幾度もありし跡なれば鳥渡いたす事 何とも恐ろしくきこへ市中金玉のびるひまなし

鹿しま臍たくせん

同九月下旬鹿しま言ふれに似たる烏帽子装束ニてかゝる時節に悪説ヲ申並らへ 祈祷札 御符様のものを十二銅にて賣りあるくまいすもの 是ゆへ人氣あしく是迄難義かきなり候所まだ此上

悪しき病やまひ地震 雷り 不作出来しゅつたいいたせバまたくうめ目見る事と皆々死ニ入如くなる 此時公義

より下役人是を捕らえ其町内會所江引こみしらへける所にせもの◎もふけいたさむと工みなれハ急度

御しかり給

ひゆるされける 其後鹿しまことふれ耆人も来たらず 是珍事なれハこゝに寫うつス

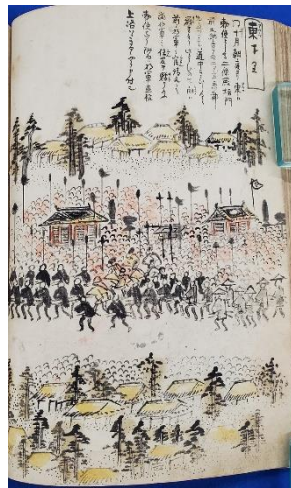
トウニ
統仁天皇様

叡中ニ而鷹司
関白ヲ打給ふ

同末ノ九月上旬鷹司関白殿いかなる事にや 東よりつかみ玉ひし事朝廷の叡聞エイブンに達たつし参内之時帝座カシを立玉ひて舜しやうにて関白之頭ヲ打たもふ 何分大力之帝ノ打玉ふ事なれバ何かわもつてたまるべき冠ハ紐切トして飛チび散り ひとひより血ながれ装束をけがし 数多ノ公卿にかいほうせられ紫宸殿シンシテンヲ下りたもふ まづく帝ノ逆鱗ゲクリンヲ納メ奉り 其日より関白ヲ取あげ九條殿ト替る 是俗にいふ夜ばりよこきほり出し夜尿ベソこきのたとへ是ナリ 文久三ノ四月殿下ノ惡事あらわれ 関白ハしばらく近衛殿かわり役五月より改メ一条殿関白ト成ル

アツマ
東下り

同午十月朝廷ヨリ東江勅使として二條殿 坊門前大納言さま二々方京都出立ツにて道中きひしく嚴重けんなり 此たひの下向こうハ前ノ將軍之官くわん請取て當將軍之任官にんヲ贈り給ふ勅使なり 附而ハ將軍直様上洛いたさるゝやう申付也



二千七百両

同安政六年正月四日之夜瓦町米多盜賊這入り右之通金子取 顔ハ薄肉に化粧致し 黒に丸がけ帶網じばん 朱さやノ大小 百日かづらにふこの笛 かさねわらんじ左ながら當時音羽や多見蔵といふつくりすいな男なり 米多女主にして支配ハ番とう 両人ながらくくり置きかへる それを手にあてきひしくなり新ぼりにて捕らへらるゝ それを入らういたし張り付に上る 其わけハ◎

◎元此男廣しまの生ナリ 大坂へ来りて三年以前米多三久三奉公いたし よく勝手ハしるゆへ此仕合ナリ 米多主後家ヲしはり上しゆへ驚キ後家ハ病氣付キ死去する それゆへ主ころしと成はり付ナリ 古今珍せつ故爰にうつし置也

盜賊の伊勢参宮

伊よ之国より元船にて来りみなく 船へかへるゆへ長らく吟味なれ どもしれぬはつなり十分盗みとりしを伊勢参宮思ひ付そろへ二て

安政六未正月中旬中福しま木綿屋源兵衛ト申両替へ

船より上り船場にてかんち

盗人六人連レにては入百五十両ト着るいとる それよりきびしく

まじりあるをとらへ見れハ

御たづねなり 六人之内に頭立たるもの片目有り 世間へしらせず

これなりおもしろき盗人ナリ

ばくゑきするもの乞食片目のもの皆々よひ出し御尋也

公義にもかんちよび出し給ふ 其人数式百人うたがいかり

さしたる事もなくゆるし給ふナリ 其後三月前六人連の

伊せ参宮と相見へ上着そろへにて通る 是天罪といふ也

其内に片目壹人つれハ六人みなく伊豫之国なまりなり

公儀之役人はヲとらへせんきなされけれハ此もの仕わざ也

みなく入牢之上罪におこなわる

盗賊が装束揃への伊勢参宮おとまりなされト牢へ引かる

東藤和泉守義高

西世三ヶ国ノ簾がしらニ而智勇也 文久之ころ

安政六未四月中旬天満屋しき江御着有ツテ川口くノ陣順見これあり 直さま江戸へ御立アル 供まわり強勇らしき家来殿さまト同様にて皆々十五人そろへナリ 三番目ハ殿ナリ きながら西世三ヶ国の簾がしらトいつべし 供まわり皆くりつぱナリ 和泉守さま年齢五十才計りにて威あつて猛し男ふりよとして女ハまよふ殿さま也 皆京櫛やくトほめる

高岡にせ切手吟味

御捌山本各之助様也 アザヤカ

同未六月中旬元ハかこや町佛壇や倅なり 前かみろ家出 親宗兵衛實躰なる人ナリ 倅宗吉ト云し者今清吉成人之後下ばらへ来り古手うり買いたし候所 ふと居候置ギ候 此もの元高岡まんにうに下も男いたし候ものニ而高岡ノ勝手ハよくしる也 奉公引ク時まんちう切手ノ判ヲことくく盗みいたし判やにて人しれす彫らし 是を用ひにせ切手二万余すり出し 高岡切手ぬけものト心得こちらへ百まいあちらへ二百まいと欲の世かい買人多し 中にも取つぎ出来て此切手にて高岡しらず大損歩ナリ 程なくあらわれ入牢いたしみなく牢死ゆへ事なく相済ける 其ころ評ばん高し

曾根崎西ノ會所にて責られみなく申上る

古手屋清吉

申舛くどうぞ

ゆるめて下され

ませ いたい

涙に□ろし

居候喜助

元高岡之男也

いたい

極楽の道づれ

安政六未ノ七月ばらくと三人

あつぱれおしき人無淨の風ハ時

きらはず此三人おしがらぬものハ

なかりけり

文政時代にハ青柳とて中頭勤メむつかしき角力也

弘化にハ真づるトいふ 此人朝日山ニ成りいつれにても

うけのよい男ナリ すもふ十日目に死ス 小はせ江送る

そうれいすもふ取おくらぬものハなかりける

清七親かたとハ別して

こころやすくして

此とき道づれ **朝日山**

清

ヲ、イ、朝日山親方

娑婆ノなしみじや咄も

あり 一所につれにして下され

武蔵野

七月中旬よりすもふ四日勝 五日目闇灘ヲ

外トむそふにのせてなける 其夜ヨリ

大ねつはつし六日目明方に往生

小兵なれとも十五両の関とりなり 三ヶ津ハ皆々泣^ナク



加奈川唐人ころし 死かいハ加奈川にうづむ

同末八月下旬加奈川交易場にて茶や町ニ而相手

かまはずはひこる唐人五六人有 いつくの侍^{さむらい}イカ

しらねども是ヲ聞付ある夜壺人來り うかゞひ

見る所向^{むか}ふより大しんと見へ唐人供に連レ来る

上官ノ唐人右之侍イ是かと思ひ行當る唐人も

とがめける内ぬき打に切り付そうどふ也

さかせどもはや侍のゆきがたをしらず

唐人屋しきへきこへおひくかけ來り

かいほうすれども最早事切れて死スナリ

此唐人別して能キ唐人ト相見みなくなみたこぼし

天下へ此事ねがいける故三ヶ津江御触出るナリ

人ハ何ともわからねど其場に落散りありし品々

ハ花色ノふつ先羽織刀之つバ元より折し身一トこし

異国通用銀之財布日本之銀に直し三ツ目也

天下うはいふ出れども今に相わからず是みな日本をうらむはしとなるべし

やよいの深雪 ^{みゆき}

安政七申のとし閏三月節句例年ノ式日にて大名小名御賀ヲ

祝し登城アル 此日いかなる悪日やら大老井伊どの登城先に

水戸浪人いろくニ変じ登城見物之ものト見せかけ入こむナリ

み戸浪士

井伊との御駕先へ直訴のごとく菅人むかふ 供まわり是を

すがたをかへ

さくゆる内先歩行式人を打切ル すはらうぜきト我レ一と

さくら田へ入こむ

向ふへ目をくばる内のりものこしに鑓入る 国賊ノ張本のがれ

かたく聞なくハ四月也 それに何ぞや六寸之深雪 これ天罪といふへし

いゝどのハろう人ともにはさまれてこれぞにほんの大へんとなる

命をまと

雪ハますく降りしきる雪間

向ふハ見へず是そ天のたすけなりと

いよく氣力まし

先がち

ハ初雪や

ふいうたるゝ

身に降りかゝる

初(カ)谷市五郎

つめたさハ

斎藤監物

劔キの山と

訴訟ありげにおねがいゝト

氣ハ張りの山

のりものにむかふこれゆへ先がち

のりものゝ内ノ氣ハいかゞときつし給ふべし

引のけんといたるヲ打ち切ル

晴る存念

小笠原秀之助

二百石 年廿七才

ハ雪深く

水戸臣 二百石

こころハ弥生乃

いなば十蔵

華の名も

此とき一ばん

櫻田御門

やり 井伊との

鑓で月影

を突

三百石 年廿一才 強勇ナリ

片桐權之助吉兼

井伊との左り若とう也
此人なくばさんぐ也



ちらす火花

カリノ名

八樹ハ檜木華ハ

廣岡銀二郎

櫻田水戸ハ武士

是水戸ノ九男也
後二備前江養子也

大関和七良

千騎に一騎

森五六良

木股与一良

佐野竹之助

鵜殿幸三郎

思ふぞんねん

谷弥十郎

鯉淵要メ
五十
八才

山口辰之助廿八才

鳥井右内

堀源之進

修羅のちまた

薩州有田治右衛門

近衛殿へ姫君入玉ふ^④附人ナリ

水戸ト近との少シノ筆法アリテ

此時加勢するはたらきはげしく

あまた手きすうけ

片桐ノ見付番所にてたおれ死ス

磨く武士道

井伊之家士三百石行年卅七才ニ而

劔法ハよし 別して強勇之名高し



此日式日ノ曠なれハ別してよそをひ

御供する也 不意の乱ぼうなれバ何いふ間もなく

寄り来る敵にわたり合二人を切りたおしける

其はたらき人間わぎにあらずといふ

渡辺泰輔治忠

是井伊の勇臣ナリ

脇坂侯首実検

乱ほうノともから脇坂へ折入首じつけんたのむ

脇坂申けるハ我ニひろういたしたなれども

是ハにせくび 其わけハ首しつけんと申さバ其人の

片袖に(カ)つゝみ持来るヲ実トする也 大将たりとも

其ままにてハ鷹首としかり付玉ふ 剛勇也

ハ智仁勇廣いお江戸に名ハ龍野細工りうく仕あげ御老中

水戸ノ臣

乱ほうノ

強勇ども

井伊どの、

尾らうなヤツら

すきりおらふ

首じつけんヲ
ねがふ

即死

雪ノ残黨

※図のみ

天王寺大黒堂

高橋多一郎晴隆
悴同苗庄左衛門正隆

用人にて三千石行年五十三才
小姓ニて無役廿六才

同三月節句櫻田御門先にて式日登城ヲ考大老ヲ討とらせしハ此人之さし図ナリ

是程剛勇其場江も立あわず五人連レにて浪華江さして来らしれ事

外に謀計にても有事と相見へ候也

鳥か啼あつま里の真いろハふす

切腹図

血文字

宗

路金七十両



生玉の切腹^{セツク}見^ミ□^{ナリ}

公義役人

死二切ル迄

こわい

切腹図

水戸ノ士 篠原源太郎

高橋と共に浪華ニ来り 町奉行を御尋に成り

公義の

其身にせまり 自害いたし死去ス

捕手こわがる

浪華^{ヲク}とが人送り^{ヨク}与力^{ヨク}
江戸江 同心

万延元申ノ四月すへ西国九州ニ而補^トらへし水戸浪士

御城代奉行より申付網のりもの五挺ウ仕立江戸へ

とが人

引わたしに相成ける 附人と而 山本善之助との
由比又太郎との

堀大八郎

牢番五人

都合同勢五十人ニ而送るト云

五十三次之内ニ而らうせきものあらん事を恐れ

泊りくハ別して気あつかいナリ 其時

山本八智勇アリ 由比とのハ強勇それ故

とゝこをりなく五月十二日江戸へ入り渡スナリ

田上軍蔵

唐人江戸はひこりける時

江戸町中唐人ころし

細川の藩中朝比奈伴吾義澄^{ハシ}卅一才^{スミ}
禄三百石大力ニて尺六尺一寸

申とし正月ころより交易十分にやりたれバ

日本ノ大將軍

唐人ともハ日本ヲしたかへし氣とりにて

ゆるし玉ハれくるしい

日毎くに出馬いたし品川 深川 大道ヲ

たれぞたすけてくれハア

我かもの顔に乗り出し年より子とも遊^{アソ}ふも

かまわず邪魔になれハ蹄^{ヒツメ}にかけん勢イなり

子ヲ持し親ハかなしみ店の賣りものハ只^タ

とり喰^ツらひ乱ばうの有さま諸人のなげき

うすく其噂^{ウワサキ}聞此伴吾どの日にく少シツ

御隙もらひ江戸中何くわぬ顔にて往来イス

有ル時唐人商人店をそめき居る所

伴吾どの耆人ノ唐人横つらはる 其ま

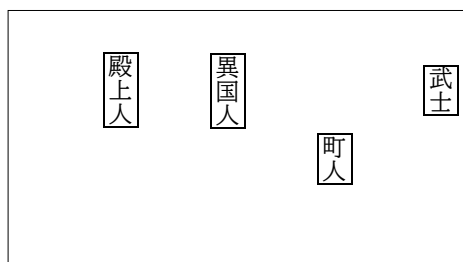
セツジ耆人首筋つかみ小家根へほり上る也

此通十八人なれハこり／＼して江戸はいくわいたさず
なぐりころせし唐人八人ナリ 何ときなりとも我レハ
肥後ノ朝比奈ナリト大手ヲふりてかへられけるトいふ

都清水江奉納額 施主人
しれず

(額図)

万延元申五月中旬いつくより奉納いたしけるやら
長サ老間余巾間中ノ繪馬かゝり有ル おもしろき画面
なれハ誰いふとなく群衆いたす也 十三日に上り同
十五日に臺所までおろす 施主ハ某とばかり
是世をかなしみたるものゝ仕わざなれどもかゝる
大そうなるものいつ之間にかけしやらしるものさうに
なし 神／＼よりなされし事は 是ふしぎの
第一なり 文久之ころトおもひ合し給ふべし
其図にあたる事有へし 恐るへし／＼



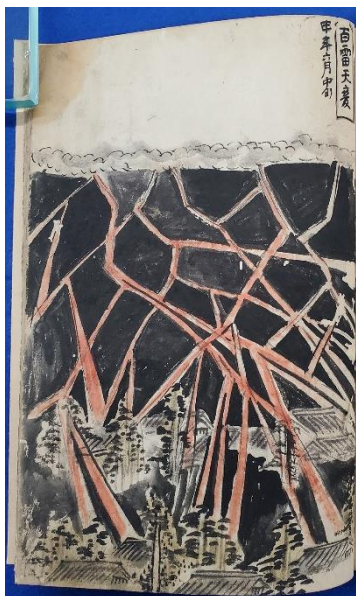
無利の理屈 リクツ

同五月下旬廣しま候申けるハ 此たび井伊かもん往来にておのれが首うしない言悟同断ノくせものに
知行其まゝあておこのふなれハ我国ノわかれ 浅野内匠

(以後空白)

百雷転変

申年六月中旬(以後空白)



おとし噺シ

同七月上旬堀川たるやばし咄しノ席毎夜／＼くんじゆいたし 別して入ゑらし 此夜ハいかなる悪日
やらやふ入いたしたる子やらいんきよ旦那やら格別上品之人多し 初夜まへよりみな／＼からだゆ
る如くおほへいる 家ノ古びたるものか 但シ人の平均なるかいんぐわノ寄しものか何ともなく一聲
ひ／＼ト其まゝ家ハ川中へくだけこむ これ前代未聞ノ珍節なり

團の上違ひ

翌七月廿三日此日すもふの六日目也 組合ハ 熊川に
玉の岩ナリ 行司團ノ上工合によつてもめる也
すもふ合せ其日角力出役の頭取り 行司強情ばる脊切勤る故 京都華ノ峯土俵江上り 行事之類

らを打ツナリ たちまち血ながれ土俵けがす 長／＼ともめ合此すもふ頭取預リト成り納るナリ

申としの水損

庚申雨は六十一年目に當る也 此春三月彼岸ノ入々ふり出し 三月モ半月雨 四月七部雨 五月
植付雨多し 六月土用まへより降り出し いよ／＼田畑くさり 其上内水にてぬれ田ハ白波ト成ル 此
時土（以後白紙）

水戸の建札

隠居ハ外国取引□□諸大名の心わからずして 我一国に大成ル建札いたし 大名之氣質をためし玉
ふ成トいふ 是あつばれ 強けつ（カ）のなす所也

此国の外外国

ヲシヤ
フランス
二人番所へ上る 佐野亀五郎殿 善 禄三千五百石也
左エ門ノ家か（カ）し也

申□十月川口番所江上り鋤ぬき ゆう／＼ト通り何ともあやちわからず 日本に剛勇ハ
此時分ハ交易最中なれば 唐人無礼するとも 日本を手をいだし
よつて異国人折／＼日本ノ圖ヲうつす也 井伊との手つきより こしぬけめ
外国方日本ヲ有ツテ なきやうに思ひ今 くやみてもおそし／＼ 目にも見せて
残念／＼ こましたい

大根とぼうだら焚

但シ此ものとも大根にしてハ

は・巢（カ）か有り ぼうだらハ

つかり過（ス）ギてチトくさい

醬油（タキ）と薪と手間ぞん也

是からさかりつと

善人出て世界ヲ

よりわけ下されねバ

市中千ころしに成べし

西奉行久住佐渡守

古今まれなるぼうだらなり

米高ハ苦にならず只おのれが

酒くろう事を勤メ与（カ）する

市中ハこけてもたおれても

われさへよけれハよいトいふ奉行

其時市中ノわる口

日本の大湊にハ

名がわるひまた

おいでなら苗氏

仕替へて

どうしま

年行司大正

此もの人になきけ

船場 井池 高らいはし

しらず米高之所
年行司にてありながら

脇より買廻し

紀州外之国々に(カ)

おくる事あらわれ入牢

残らずけつしよ二而

曾根崎村の□いふ也

是人之うらみナリト□□□□

三文高くゆへ米ノ札ト
ともにしばられ
入ろうするこれ
米や／＼ノよい
手本となり

米屋之札一とう下る

品川御堂

唐人ころし



おのれら故に江戸の

こんきう 今こそ思ひ

しらせん かくししろ

毛唐人め

命ばかりハ

おたすけれんぼん

東下り 丙午誕生

和姫宮十四才
強勇ナリ

安政七酉正月御輿入の噂まち／＼也 此たびノ江戸行ハ

御嫁入にあらず 諸国何となくさわがしくよつて朝廷様ノ

おぼしめしハ何分武家同士ハたがいに氏をあらそふ時節故

いつか納る時節とうらい致すまじ 女成とも都コより

東へ下れハ諸大名帰伏せんと思し召 かりに東江妹宮を

御かしあたへ給ふ也 輿入ととなへハ恐れ多キ御事ナリト云

和姫宮申され候ハ此度東夷江下り事 朝ていノ御為とあれバ

たとへ命おわるともくるしからずと申いよ／＼西十月

文久ト改メ東江御輿を向られける

洛中洛外江施行

同萬延二霜月 文久ト改元アル 當今様妹君敏ノ宮様ト奉申

諸司代

別して賢女にまし／＼智仁勇ナリ 民ノうれいをなげきたまい 若狭
施行被成候 大判五十枚ほどこし玉ふ 一軒前三文ツ、渡り候 いんぜんを
皆／＼御守ニいたし付ものおこり ほどなく座に落る也 こふむる

魂イのせんだく

弘化年中我領内之寺々八十九ヶ寺アル也
皆／＼破却いたし釣かねをたくり大筒に
吹かへ仏法ハいらぬ物と坊主ハ國ヲおい出し

是儒道にくわしき故ナリ 其後天下ヲ

毒かひいたし悴ヲ天下ニいたさむたくみ

また／＼我ハ箱館に居城ヲ造り尾州公ヲ

大坂之城江入唐船ヲ引入手をぬらさず

將軍家をたおさんとのたくみはやくも

国主々にらまれける故京都江参り

少シの縁ヲもつて近衛とのヲかたらひける

朝ていにもら□□をにくみ玉ひ井伊とのハ

ヒイキ也 此たひ大老となるゝ三家へ

蟄居申付られし事皆天子ヨリ申付也

正直なれば□□事のあるべかりしを

井伊どのうぬ惚にて欲心氣ざし□

□加奈川交易はしめシヨリいよく日本の

いこくと成皆井伊とのをうらむ 其虚を

うかゞい桜田にて首とる 元ハ水戸ノふかき

謀計水ノあわと成 今また井伊との欲より

水戸とのヲ諸国より誉メまたなき人ト□□尊ひ

けるより智者は水戸死去といふらし我ト替玉

国主／＼江まわり遣し京都よりよひ出しあらハ

朝ていの心きん御やすめ下さるやう頼入ト

たのまれける後に井伊とのと水野トかわるナリ

両家都入り

日毎に内裏江上り給ふ

文久二戌ノ四月上旬諸国動乱ニ付朝廷ヨリ

毛利 島津両家御まねきによつてさつそく

京着アル 朝ていより輪言によつて前より

御しらへられある所元八十四代將軍御他界より

事おこり 大小名氣に合ずして我國／＼江

引とり給ふより水戸ハ一ツ橋ヲ將軍に直さんとする

国主ハおもしろからず 井伊どのも水戸の志をこぼむ

唐人ハ押かけ来る 水戸ハ異国平らげんといふ 井伊これを

とがめ交易ト成り 其上大老と成り三家へ蟄居申付

ます／＼交易いたし加奈川出来イス いよく水戸侯

是ヨリ 金澤領

安戸監物

一都にて

開らく

いも店

団子店

嶋津和泉

立腹^{リツフク}にて桜田のそうど^{ソウド}ふ發る 浪人^{じうまん}充満す 国主ハこうたい

いたさず九條殿関白にて有りながら天子より洛中洛外江

御すくひ金出され候 大判百五十枚也 これをほとこさず^{ワカ}我物に

いたし京町中へ名目いたしかし付る 京与力 同心 諸太夫 顔役ども

これにかゝり金もふける物おびたし 大名へかし付ハ紀州伊左川也

古金ノ十両判なれば壹両ヲ三両壹部式朱也 都五千両施行いたさず名目に遣ふ

関白の不行^{きやう}せきにくみても猶あまり有り 皆く此事露頭にて九条殿并伊久世 安藤

外□十五大名みなく唐人と一家のちなみをむすぶ同めいなりといふ是□□□□□□さ□き玉ふナリ

□□騒動

右之通四月和泉殿京都江御出之節御供いたしたがる者七人アリ 是ハ強勇ト計り一ちへもの故国に残し給ふ所 国にてこたへなしに薩州ヲ出る 是故国ヲ大坂やしきへ早飛脚到来いたし申和泉様国に残し給ふ無法の家来七人連にて退去いたし候間殿ノ跡おい候様子な^カけれハ
へけさ切りも堂切りも有りこんさつはむりじやこぎらぬ〔寺〕田乃庭 寺田屋

□□□□り

※傷みのためほぼ判読不可能

城図